

罰当たり男への 女悪霊の 祟りは金責め

祠を穢した男が
女だけの地獄に小旅行、
寄ってたかって
呪いの玉責めを食らわされる！



玉子王子 著

1章 悪霊を遠ざけるためにキ○タマ潰し！ ……という目的も忘れて、延々キ○タマ潰しを続けるドS女子たち

古い旅館。

それを見あげる男。

「へっ、お化けだろうがなんだろうが、女なんぞ怖くねえよ」

せせら笑う、というしかない顔の男。

見栄えはいい。

それだけでもててしまう人生を送ってきた、名前は引田。

顔だけでいい思いが出来る、だから人生も舐めている、女も舐めている。

横に立っているのは、南部という編集者の女だった。

引田は一様作家である。

とはいえ、実際のところ立ち位置はまずい。

クリエイターの類は、大体四つに分類されている。

- 1 売れていないが伸びるかも知れない。
- 2 のびしろはないが、すでにある程度売れている。
- 3 売れている上に伸びている。
- 4 売れてないしもう伸びそうもない。

その男、引田はどこかというところ、どこでもない。

ギリギリ商売になる水準売れていて、これ以上はあまり伸びないと思える、という微妙なところだ。

まあ、**不倫でもやらかせば切られる**といったところ。

引田は「結婚もできない奴は奴はクズだ」という**クズ信念**によってさっさと結婚している。そして女遊びは大好き。

つまりは、いつ**週刊誌に砲撃を食らってもおかしくない**生活をしているわけだ。

そうならないのは、知名度ゼロの三流作家だからでしかないだろう。

彼を探ったり、彼のネタで騒ぐメリットが週刊誌側には無いので、相手にされていない。

一般人も彼の事など知らないなので、不倫デートをしてもまあ危険は無い。

それをいい事に、というわけでもないだろうが編集者にも手を出す。

仕方ない男だ。

売れていないので、編集者南部も適当にあしらっている。

というか、正直いい大学を出て正社員をしている自分の方が売れない作家よりは上だと思っている。

ある意味お似合いの、精神的にいいとは言いがたい二人だった。

そんな二人が旅館にやってきた。

二人きりでだ。

しかし、男女間の何かがあるわけではない。

この旅館に女の霊がでるといふ噂があるので、確かめにきたのだ。

趣味ではなく、引田の仕事のために。

元々そういうホラー系の話を書いていたわけではないが、ホラー風味の話を書いたらちょっと評判がよかったので、そっちに手を伸ばせないかということ。

望みは薄いだろう、と編集者は思っていた。

そもそも、彼はそういうのを期待されていないのだ。

ホラー好きはわざわざ彼の作品を見ない。

まあ、一様宣伝はする、新境地だとかなんだとか。

だが、そんなに大金を使ってやるほど売れてはいないのだから、やはりたかが知れている。

売れているものはさらに宣伝もしてもらってさらに売れ、そうでないものは沈んでいくわけだ。

なんとも悲惨だが、まあ編集者としては、作家はそういうものだと見切っていた。

出版社全体として、本を出していけばいいのだ。

一人一人の作家の浮沈などどうでもいい。

引田程度なら、それこそ代わりはいくらでもいるのだし。

そんなことより、バスで酔ったことの方が重要だった。

「先生、ちょっと休ませて貰っていいですか？」

「先生、ちょっと休ませて貰っていいですか？」
見るからに顔色が悪い編集者。
が、それを見ても引田はただ不機嫌そうな顔で吐き捨てるだけだった。

「あ？ いいわけねーだろ、
これから仕事だ。
さっさとチェックインしろ」



——三流クソ作家が……

眉を顰めつつ、旅館の女将に対応する。
「ご夫婦ですか？」
「ははは、俺にこんなの吊り合いませんよ」
笑って手を振る。
あまりにも爽やかなので、冗談だと女将は思った。
が、素人が上手く合わせられる冗談でもなく、困った顔をするだけだ。
そして、引田からの「なんちゃって」というような台詞を待つ。
もちろん、そんなものはない。
ただ本気なのだ。



見るからに顔色が悪い編集者。

が、それを見ても引田はただ不機嫌そうな顔で吐き捨てるだけだった。

「あ？ いいわけねーだろ、これから仕事だ。さっさとチェックインしろ」

——三流クソ作家が……

眉を顰めつつ、旅館の女将に対応する。

「ご夫婦ですか？」

「ははは、俺にこんなの吊り合いませんよ」

笑って手を振る。

あまりにも爽やかなので、冗談だと女将は思った。

が、素人が上手く合わせられる冗談でもなく、困った顔をするだけだ。

そして、引田からの「なんちゃって」というような台詞を待つ。

もちろん、そんなものはない。

ただ本気なのだ。

そのくせ、部屋に入ると編集者の近くに座って、体に触り始める。

今晚抱きたいのだ。

それなら多少はご機嫌もとればいいのだが。

編集者のほうは、本当に調子が悪そうだがまったく気にしない引田。

そんなありようでも、顔がよくて「作家」なら女を落とせてきたわけだ。

いや、直接編集者が受けているようなことをされた女には逃げられても、代わりはいくらでも見つかる。

あしらうのも面倒なので、話をそらす。

というか、仕事をはじめるように促す。

「先生、何か御札でもないか探しましょうよ」

「お前が探せよ」

いいながらも、立ち上がる。動くなら、そんなことを言う必要はないだろう。

何を思っているのか編集者にはわからない。

引田が壁に掛かっていた富士山の絵の額を外す。

裏に御札が張られていた。

「いきなりだな」

笑って、それを剥がす。

あっさり、ビリッと音を立てて剥がした。

信じがたいが、とにかく一瞬も迷わずにさっさと剥がしてしまった。

「え？」

どうでもいいシールでも、余所に張っているものを勝手に剥がすのはおかしいだろう。

ましてや、大事そうに張られているお札だ。

呆然として声を上げる編集者。

冗談かと思うが、どういう冗談になっているのかわからない。

もちろん冗談などではない。

恐る恐る、たずねる。

「その、先生今……御札剥がしました？」

「何も出ねーって」

笑う。

「話は俺がでっち上げるよ。大丈夫」

——仮に何も出ないと思っても、人が貼ってる物勝手に剥がす？ ああ、もう考えたくない。

男の精を絞り、取り殺すというような霊が出てくれれば嬉しいと思う。

が、この宿の霊はしっかり封印されているから、さほどの害は無いという話だ。


というか、そもそも編集者も信じてはいないが。

しかし、その「しっかり封印」がまさか御札一枚だったらどうしようという僅かな不安もある。

いや、それは全然しっかりしていないか。

せめて、祠か何かあってこそ「しっかり」だろう。

「大丈夫よね……」



「失礼します！」
「ん、おぐあああっ！」
腰を引く引田。
叫ぶや、女将は膝を跳ね上げていた。
ゴリ、ぐちゃ、と嫌な音を立て、
彼女の膝が引田の股間を押し潰していた。
男の命、二つの肉玉を押し潰され、悶絶する引田。
体格もよく、昔は喧嘩もよくやっとな
誰彼構わず話し出す男である。
まあ武勇伝は **九割嘘だが、**

頑強な成人男子であることは確かだ。
だが、急所への一蹴りは力も頑強さも無意味にする。
その場に崩れ、股間を押し潰して転がる引田。
「はんぐうううう！」

「ん、おぐあああっ！」

腰を引く引田。

叫ぶや、女将は着物であることも顧みず、膝を跳ね上げていた。

ゴリ、ぐちゃ、と嫌な音を立て、彼女の膝が引田の股間を押し潰していた。

男の命、二つの肉玉を押し潰され、悶絶する引田。

体格もよく、昔は喧嘩もよくやっとな誰彼構わず話し出す男である。

まあ武勇伝は九割嘘だが、並の女など相手にならない頑強な成人男子であることは確かだ。

だが、急所への一蹴りは力も頑強さも無意味にする。

その場に崩れ、股間を押し潰して転がる引田。

「はんぐうううう！」

「キ〇タマ蹴って申し訳ありません！」

「やった！ あ、じゃなくて、何するんですか？！ いきなりそんな……男の命を……別に先生の腐れキ〇タマなんてどうでもいいんですけど……蹴るなんて酷いじゃないですか」

ボロボロ本音をこぼしながら抗議する編集者に頭を下げながら弁解する女将。

「この部屋の霊は、男に苦しめられた女の霊なのです！ こうしておけば少しはお客様への祟りが少

なくなるかと」

「まったくわかりませんが、わかります。それなら仕方ないですね」

「わかっていたいで助かります！」

顔を綻ばせる女将。

頷き返しつつ、芋虫のように転がる「先生」を見下ろす編集者。

「大丈夫ですか？ キ〇タマ痛いですか？ 男の大事な、絶対急所ですもんねえ。痛いでしょ？ ねえ、痛い？ 痛いんでしょうねえ……」

意識させようという思いがはっきり伝わる編集者の言葉責め。

「痛くても、仕方ありませんよね。お化けにとり殺されるよりはましでしょうから」

「し、しかたなくねえ……」

部屋に中居たちが集まってくる。

「女将さん、お客様に何か！？」

「このままでは何かあるかもしれないんです。お札を剥がしてしまったので！」

「まあ！」

「そういうわけで……南部さま、もう少し霊を押さえる儀式をしたいのですが……」

「えーっと、それは男性の生殖器方面への？」

「はい、男性器方面への……単純に言えば、キ〇タマ潰しという形になります」

「仕方ないですね……お願いしまーす！」

「おい何勝手にお願いしてる！？」

「お許しができました！」

「はい、それじゃやっちゃいましょう！ キ〇タマ潰し！」

引田に駆け寄る仲居たち。

三十から五十ぐらいだが、慣れているのかと思えるほど素早く引田の手足を押さえて、仰向けにして両足を開かせる。

「え、あ、ちょっと……まさか……」

「引田さま、申し訳ありません！ 悪霊払いに……」

開いた引田の股の間に立って、大きく足を引く女将。

「睾丸蹴り潰させていただきます」

「お札剥がしてすいませんでしたっ！」

普段の傲岸不遜さなど吹き飛んでいた。

まだ、先ほど蹴られた肉玉が痛い。

のたうつほど痛いのが、押さえられてそれも出来ない。

ただ、この上蹴り潰しにこられた場合の痛みは現状をはるかに上回ることはわかる。

文句を言う前に、もう何でもいから謝って済ませたいという大人の判断にでた。

普段からそういう振る舞いをしていたら、この場で編集者に恨まれて切り捨てられることもなかっただろう。

それに、女将が微笑みかける。

これから自分の睾丸を蹴り潰しにくる女に微笑みかけられても困るが、とにかく上辺は優しそうに

微笑みかける女将。

「大丈夫です！ ナノ薬は完備しております！ 引田さまの大事なタマタマは潰れ次第再生させていただきます！」

「潰すのやめてくれええええええ！ 頼む！ あ、おいブス！ 止めろ！」

「……女将さん」

「南部さま、止めないで下さい。本当にとり殺されそうになった方もいるんです！」

「うーん、じゃあ仕方ないですね！ 先生、睾丸は諦めてください！」

「いやだあああああああ！」

——よくわからないけど、ブス呼ばわりされた女が自分のキ〇タマ守ってくれると思うなんて能天気すぎるわよね？

流石に、玉が潰れたら治らないというのなら、女将たちもこんなことはしない。

編集者も体を張って守る。

だがナノマシンの入った薬を飲めば玉ぐらい十秒で治る時代である。

玉を持たない女たちの一部には、どうせ簡単に治るのだからある程度理由があれば別に玉潰しはそれほど避けるほどのことはない、という考えが広がっていた。

一方、男はどうか。

いうまでもなく、治ることは熟知している。

だがそれは潰れてもいいという考えにはまったくならない。

最悪、再生出来るのだというセーフティーでしかない。

治るんだからジャンジャンバリバリ睾丸潰してもいいじゃん、という一部の女のような発想は、自分の股間にそれがぶら下がっている男はまったくたどり着かない。

ましてや、自分の玉が潰される状況で「治るんだからまあいいか」という男は一人もいないのだった。

それこそ玉責め好きのマゾであっても、最後の最後で実際に潰されるとなると動揺すると言われている。

まあ、内容が内容だけに誰が統計を取った話か分からないので噂の域を出ないが。

ともかく、普通の男なら「治るとしても絶対嫌」というのが絶対的多数派であることは間違いない。

「あ、その前に……女将さん、潰れたらすぐわかるように」

「あ、そうね！ 引田さん、すいません」

「え、あ、やめ……」

ズボンを下げられる。

見栄えもよく、体格もよく、態度まで大きい引田。

その股間がどのぐらいか、女たちはちょっと期待していた。

と、目を剥く。

一瞬、女たちの視線を独占する引田の男の部分。

剛毛に埋もれて、よく分からないほど、そのシンボルは極小だった。

「……」

目配せしあう大人の女たち。

客商売で、相手は客でもある。

大っぴらに、評価を口にするわけにはいかなかった。

大きいならともかく、超極小短小の一物である、下手な言及は客商売としては命取りだと大人の女にはわかる。

その場のトップである女将がニコッと微笑む。

「あ……それじゃ、潰しますね」

台詞は怖い、一様気を使っていた。

仲居たちも真剣な顔で頷く。

が、一人だけ嘖き出す。

元々笑い上戸で、一番若い仲居だった。

「女将さん！ おチンチ〇から話そらしてるみたいですよ！」

一人が笑うと、他の者も釣られる。

爆笑の中、女将も笑いながら手を振る。



爆笑の中、女将も笑いながら手を振る。
「そりゃそらすわよ、こんなに小さいなんて……あ」

「やだ！ 言っちゃった！ 引田さんの
ペ〇スが小さいって！」

「言っていないわよ！ 悪いじゃないこんなにチンチ〇小さい人に！
男性器が小さい人に！ 体が大きいから余計短小に見えるわ！

しかも包茎だし！」

嘲笑し、指差す女たち。
真っ青で、口をパクパクさせる引田。

「そりゃそらすわよ、こんなに小さいなんて……あ」

「やだ！ 言っちゃった！ 引田さんのペ〇スが小さいって！」

「言っていないわよ！ 悪いじゃないこんなにチンチ〇小さい人に！ 男性器が小さい人に！ 体が大

きいから余計短小に見えるわ！ しかも包茎だし！」

嘲笑し、指差す女たち。

真っ青で、口をパクパクさせる引田。

他人を貶めて笑いを取るのが好きな男。

自分が笑われるのは大嫌いで、すぐに怒る。

イケメンで体格もよく、売れないものの作家といういい仕事にも就いている。

威張り散らして生きてきたのだ。

それが、女たちに押さえ込まれてズボンを降ろされ、一物の短小さを嘲笑される。

こんな目に合うなど想像したこともなかった。

震え、羞恥でどうにかなりそうだった。

その目に、編集者が入る。

彼女も、股間を覗き込みに来ていた。

「あ、おま……」

「あら、先生こんなに小さかったんだ。ふふ、おチンチー〇、ち、い、さ、い。うふふ、でも、実は知ってました。先生のペニペニくんが極小だってことは」

「な、なんでだよ！」

「先生と寝た編集の子は結構いるでしょ？ そっちからですよ。うふふ、「おチンチ〇の大きさ」が恰好のガールズトークネタだってことぐらいわかってますよね？」

真っ青になり、膝金蹴りとこの状況で縮んでいた股間がさらに萎む。

「ち、小さく見えるのは縮んでるから……」

「嘘ですよ皆さん。立ったらこのぐらいだって言うのが、先生と寝た女の一致した見解ですから」

手で大きさを示す編集者。

それをみて、大人の女たちは楽しげに顔を見合わせる。

「やだ！　なんてしょぼいチ〇ポなの！」

「超短小チ〇ポ！　お風呂とかで大変でしょ、断固として隠さなくちゃ赤っ恥だもんね！」

「これは別に金ちゃん潰さないでも女と間違えられるかもね」

「じゃ、女将、もうこの辺にしますか？」

「もちろんだめよ。念のために睾丸踏み潰しましょう」

「ひいいい！　玉だけは許してくれ！」

偉そうに何だかんだと脅迫できる精神状態ではなかった。

女たちがその気になれば即座に金踏み潰しが開始されるのだ。

「引田さまが悪いんですよ？　何でわざわざお札を剥がすんですか？」

「そうですよ。到着一時間も経たずにもう……」

「信じられませんよ！　……ペ〇スがそんなに小さいなんて！」

「ちょっと！　それはもう許してあげましょうよ！」

また笑い出す女たち。

編集者まで、普段の引田の態度が悪すぎるので一緒に笑っている。

「もう、ほら、ここですか？」

押入れを開ける。

中には布団。

というか、問題はそこではない。

引田には襖の間から女が立っているのが見えていた。

しかしその襖を開けて見える押入れは上下に区切られている。

布団が一杯詰まっているだけではなく、木製の区切りまであるのだ、人が立っているわけがない。

「う……」

「あははは！ もう先生には霊が見えてるんですね！」

「女将、もう急がないと！ 取り殺されてしまいますよ！」

「いやちょっと待て！ キ〇タマ潰せば霊が離れるってマジかよ！？」

「いえ、そうじゃないかと」

「何だそりゃ！？」

「だって、こんなことする人いますか？ 来て一時間でお札はがすとか……」

グニユ、と股間に足を乗せる女将。

グニユ、と股間に足を乗せる女将。

「それじゃ、失礼して……」

「やめ……はぎゃあああああああああああ！」

「オラオラ！ 辜丸踏み潰し！」

「キ〇タマ踏み潰されて苦しそう！」

「きゃはは！ 男なんてキ〇タマやられたら弱いもんね！」

「こっちが力の無い女だっていっても、
五人ぐらいで押さえ込んで

急所踏み潰せば、

どんな強い男でも終わりよ終わり！」

「キ〇タマ潰れろ！ キ〇タマ潰れろ！」

本当に「悪霊を遠ざけるため」なのか疑いたくなるほど
楽しそうな女将と仲居、それに編集者。

「あははは！ 先生いい気味ですよ！ 多分聞こえてないでしょ？」

「はぎゃあああああああああああああああ！」

女将と交代した仲居の足の下で

男性器を踏み潰されていく引田。

もちろん顔を赤らめ、興奮した編集者の声など聞こえてない。



「それじゃ、失礼して……」

「やめ……はぎゃあああああああああああ！」

「オラオラ！ 辜丸踏み潰し！」

「キ〇タマ踏み潰されて苦しそう！」

「きゃはは！ 男なんてキ〇タマやられたら弱いもんね！」

「こっちが力の無い女だっていっても、五人ぐらいで押さえ込んで急所踏み潰せば、どんな強い男でも終わりよ終わり！」

「キ〇タマ潰れろ！ キ〇タマ潰れろ！」

本当に「悪霊を遠ざけるため」なのか疑いたくなるほど楽しそうな女将と仲居、それに編集者。

「あははは！ 先生いい気味ですよ！ 多分聞こえてないでしょ？」

「はぎゃあああああああああああああああ！」

女将と交代した仲居の足の下で男性器を踏み潰されていく引田。

もちろん顔を赤らめ、興奮した編集者の声など聞こえてない。

手を叩いて唾を飛ばす編集者。

「あはははは！ 楽しい！ 楽しい！ 男のキ〇タマ潰すのって何でこんなに楽しいの？ 知らなかった！ みて、あの無様な恰好！ キ〇タマ潰されたらあんなに痛いんだ！ 女だからわかんない！」

その様に何かを感じた女将が近付いて囁きかける。

「南部さま、キ〇タマ潰しを観賞し、時々参加も出来ちゃう地下闘技場のこと、もしかしてご存じない？」

「え？ そんなユートピアあるんですか！？」

「後でお教えしますね」

「うわ、ここに来て本当によかった！」

こうしてドS女子の輪は広がっていくのだった。

と、襖が開く。

「ちょっと、何してるんです？」

他の客だった。

さほど流行っていないが、商売になる程度には客はいる。

「あら、お客様」

「え？ あの人が女性の悪霊を怒らせるようなことをしたから、辜丸潰しで助けてる？」

信じるわけが無い意味不明の話だった。

聞いた女たちは困惑した顔で顔を見合わせる。

偶然か、ご都合主義か。

今日この宿に泊まっているのは引田以外女ばかりだった。

「信じていただけますか？」

「助けてくれ！ はぐあっ！ 信じるわけねーだろ！ 助けてくれ！ はぐっ！ おぐっ！」

ボソボソと話し合う客たち。ふあんげな女将たち。

と、顔を綻ばせる客の女。

「女将さんのいうことなら信じます！ そういう事情なら、タマタマの一つや二つは我慢するべきですわね！」

「さっすがお客さまっ！ 話がわかるっ！」

「っていうか、私たちも除霊に参加しますよ！」

話を受け入れたというより、うさぎ県によくいるそういう女性たちなので内容の是非は問わず乗ったというのが実情ではないだろうか。

ともかく、睾丸を潰しにくる女たちが増えることはあっても減ることが無い引田は、もう白目を剥いて泡を吹き始めていた。

話している間も、引田がわめいていたことでも分かるとおり睾丸踏み潰しはまったく止まっていなかった。

少し前に、片金が潰れている。

その状況が一番大変といえなくも無い。

両玉死亡したなら、すぐ治してもらえる。

だが片金だと、もう一個潰そうと攻撃は激化する。

それは、潰れた玉の残骸も容赦なく襲うのだ。

形は潰れても、神経などは切れているわけではない。

今踏んでいる客は、その睾丸だったものをむしろ重点的に踏み始めさえする。

「そらそら、キ〇タマ痛い？ 痛い？」

「おぎゃあああああああああ！」

バタバタのたうつ。

と、その引田の声が突然一段階跳ね上がる。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！」

「あ、去勢声！ キ〇タマ二個とも死亡ですね！ 先生、女の世界によろこそ！」

「南部様、もしかしたら初体験では？」

「もちろんですよ！ アレが去勢声かあ、女にキ〇タマ潰されて女にされた情けない男の声！ って、女の私がいうのもアレですけど」

「いいえ、男性にとって、女にそういうこと言われるのって凄いい屈辱みたいですから……ここは男性を立てて、どしどし言ってあげましょう！ それがドS女子というのもですよ」

「うふふ、それじゃそうします！」

泡を吹き、完全に意識が無い引田に駆け寄り、耳に口を近づける。

「やだあ、この人、睾丸潰れてるよ。男なのに……あ、もう男じゃないか。女に睾丸潰されて今日から女の子。二個とも潰れてる、二個とも睾丸潰れてる。タマタマの残りはゼロ、去勢されちゃったね。女に去勢された気分はどう？」

「いいわよいいわよ、気絶してても、通じるものはあるわよ。意識が無くても、話しかけたら届くって言うでしょ？」

よく聞く話だが、こういう場面ででるのは新鮮といえるだろう。

その言葉に励まされ、さらに言葉責めを続ける編集者。

「引田先生はキ〇タマなし、引田先生はキ〇タマなし、ペ〇スが小さい上にキ〇タマが無いなんてもうおしまいねえ。タマタマ二個とも無いんじゃセックスも出来ないわねえ、モテない男はクズとかいってたけど、おチンチ〇とタマタマが揃ってれば十分価値ある男よ。キ〇タマ無しの先生とは違ってね」

誰かが薬を飲ませると、すぐに辜丸は再生する。

頬を叩くと、すぐに引田は目を覚ました。

「う、あああああああああああ！ い、いた、痛えええええええ！」

のたうとうとしても、女たちに体を押さえられてうてない。

そこで、どういう状況だったか思い出して真っ青になる。

「も、もういいだろ！」

「先生、本当にそう思ってる？」

もういいなら、押さえている理由がないではないか。

それは別に作家でなくても推測できる話だった。

「ほ、本当に思ってる」

「皆どう思います？」

「まだ除霊が足りないと思います！」

その誰かの言葉に、一斉に賛成する女たち。

ドS女が大量に集まり、一度玉潰しを実行して、それを目の前にして興奮している。

その状態で、目的は達したから解散。

というわけが無かった。

それがうさぎ県名物ドS女子の心意気という奴だろう。

というか、いつのまに「金潰し=除霊」という話になったのだろうか。

「次、私が除霊しますね先生」

「やめろおおおおお！ キ〇タマ潰したらお前のトコでかかぬ一ぞ、いいの？」

「あら、ウチ以外で書いてましたっけ先生？」

「……ほぎゃあああああああああああああああああ！」

黙った作家先生（笑）の陰囊を蹴り潰すように踏みつける編集者。

押し潰され、つるりと逃げる辜丸。

それでも、蹴り付けられた衝撃は一々衝撃は耳の横で火薬が爆発するより大きい。

痛みも普通の金蹴りと変わらない。

それが避けられない状態で素早く連続で襲ってくる。

金踏み潰しの絶望は深い。

つるりと玉が逃げれば潰れない、上手く押さえ込まれれば潰れる。

次の一蹴りで潰されるか、という恐怖に常に襲われ続ける。

「あははは！ こいつチンチ〇小さいね！」

「マジ短小だよ！ 体デカイのに！」

「しかもクツソ包茎だし！ 受けるわ！」

さらに、ゲラゲラー物を嘲笑される。

痛みと恐怖と屈辱で絶叫しているしかない引田。

「あああああああああああああああああああああああ！」

「そらそらそら、セクハラしやがってこのクソ野郎が！ っていうか、ブスつったな？ それはマジ

話、キ〇タマ潰されて当然の台詞だよなあ」

「そうよそうよ！」

「女だと思ってなめんじゃねーぞ！」

「キ〇タマ潰されて反省しな！」

大盛り上がりの客たち。

すでに、押さえるのも彼女らに代わっていた。

女将と仲井たちは楽しそうに周りでみているだけだ。

ドS女子による、エンドレスの金潰しが元々の目的も忘れて続く。

体験版終わり

この後女怨霊が現れ、主人公は過酷な金責め体験をします

数百の女怨霊たちに同時に玉責めされ、

反省しないので一時地獄送りにされて万を超える女たちにキ〇タマ責めです。

続きは製品版でお楽しみください